

活用

大西拓一郎

A 解説

1. 活用とは何か

語は語彙的な意味と文法的な意味の組み合わせにより運用される。これは品詞の異なりを問わず一般的な方法である。

このような運用を行う際に同じ語がさまざまな形態をとることがある。これを「語形変化」と呼ぶ(通時的・歴史的な「変化」ではない)。

語	否定	言い切り	命令
<書く>	書かない	書く	書け

語形変化のありかたは、語によって異なる。ゆえに語ごとにどのような語形変化を持つかを知らなければ、その語は使用できない。

語	否定	言い切り	過去	命令
<書く>	書かない	書く	書いた	書け
<読む>	読まない	読む	読んだ	読め
<見る>	見ない	見る	見た	見ろ

このような語形変化の総体が「活用」である。ここから、活用とは次のように定義される。

「語が文法的内容に応じて示す形態の総体」

語形変化は、限られた枠の中におさまる。文法的意味を表出するための枠と個々の語が所属する枠の組み合わせの中で語形変化は行われる。この有限の枠の中でかなりな数にのぼる語彙が運用されることで、大量の語形変化が実現する。

仮に意味表出の枠が 50、語彙の数が 2000 あったとすると、語形変化の数は 10 万になる。この数を多いと見るか少ないと見るかは判断が分かれようが、未整理なままの語形変化のデータは、一見する限り、カオス状態に見えるだろう。

活用の記述とは、このような語形変化の枠組みを抽出する作業にほかならない。同時に語形変化の枠組みは、方言により異なる。したがって、活用が記述されない限り、それぞれの方言における動詞や形容詞といった語の具体的運用は、本来はできない。

2. 日本方言の活用

語形変化は、動詞・形容詞・形容動詞において著しい。そのためこれらの品詞は「活用語」と呼ばれる。日本語において動詞・形容詞が語形変化を持たない方言はない。

それぞれの方言での活用のありかたは、中央語の歴史的形態と密接な結びつきを示す。

例えば、二段活用と呼ばれる語形変化の型が、近世前期までの中央語の動詞に存在していたことが知られるが、これらを引き継ぐ形が、九州各地や南近畿に残存することが知られる(GAJ2-61(国立国語研究所『方言文法全国地図』第2集61図、以下この省略表示に従う),2-64)。

また、現代共通語では失われたサ行五段動詞のイ音便(「出した」が出イタのように現れる現象)が中部以西の各地に見られ、これも中央の歴史的残存として知られている(GAJ2-92)。

一方で、中央の残存とは異なる個別の方言ごとの歴史的変化が見られることも多い。

顕著な例として知られるのはラ行五段化と呼ばれる現象である。「見る」「起きる」など共通語での一段系の動詞が、命令形で見レ・起キレのような形をとることが東北・九州を中心に見られたり(GAJ2-85,2-86)、否定形で見ラン・起キランのような形が九州を中心に見られる(GAJ2-72,2-74)。これらは、「売る」「取る」のようなラ行五段系の動詞に平行した形に変化したものである。

また、形容詞にあっては、歴史的に音便として発生し、そこに母音の融合が被さった形が高カッタ、高カッタのように語幹に取り込まれる現象が九州や東北で見られ(GAJ3-141)、中央語とは異なる方向への変化したことが知られている。

歴史的に見た場合、全国の活用は、中央の遺構と独自の変化として、おおまかな整理ができる。しかし、そのような整理の基盤になるのは、個々の地点での確実な記述である。それを実行するには中央との結びつきや成立の過程という観点をいったん排除して、その方言プロパーの記述が求められる。そうでなければ、歴史的に説明できない現象、中央との結びつきが明確ではない現象を見落とす危険性がある。変化の観点は、正確な記述を受けて発展・展開するものである。

3. 調査の着眼点 岩手県種市町平内方言の記述を例に

筆者自身が記述を行ったことのある岩手県種市町平内方言における動詞の活用(大西 1995a)を例にとりながらどのような手順で活用を記述するかを説明する。

3.1. 語形変化の要素

方言の活用の研究においては、語形変化のリストアップが求められる。そのようなリストの中で、語がとる諸種の形を「活用形」と呼ぶ。なお、活用形と言った場合、語形を指すこともあれば、枠組みを指すこともあるので注意しておきたい(cf.3.3.)。

それぞれの語の語形変化の中で変化しない部分を「語幹」と呼ぶ。一方、変化にあずかる部分を「語尾」と呼ぶ。

整理すると、活用形・語幹・語尾の関係は、次のようになる。

活用形 = 語幹 + 語尾

一般に、文法内容を表す具体的な形は、活用形単独で、もしくは活用形に助詞・助動詞等が付

くことにより、現れる。このような形を「文法形」と呼ぶ。そして特定の文法内容を持つ文法形を指す時は、「～形」のように呼ぶ(例 否定形)。文法形は次のような構造を持つ。

文法形 = 活用形(+助詞・助動詞等)

以上をまとめると、文法形全体としては次のような構造になる。なお、活用形と同様に文法形も具体的語形を指すこともあれば、枠組み(文法カテゴリー)を指す場合もあるので注意したい。

文法形 = 語幹 + 語尾(+助詞・助動詞等)

種市町平内から具体例を示すと次のようである(後述の活用表を参照のこと)。

文法形 活用形 語幹 語尾 助動詞

「書く」の活用形 1 kaga = kag + a

「書く」の否定形.....kaganaR = kaga(=活用形 1) + naR

同じ活用語尾を持つ語のグループを「活用のタイプ」と呼ぶ。グループとはいうものの、そこに所属する語の数は問わない。1語しか所属しない活用のタイプもある。

3.2. 語形変化の整理

種市町平内方言では、例えば、次のような活用による共時的な語形変化がある。まずは、おおまかにカタカナで表記する(濁音/鼻濁音を区別せず記す)。

	否定	並行	言い切り	命令
書く	カガナー	カギナガラ	カグ	カゲ
飲む	ノマナー	ノミナガラ	ノム	ノメ
食う	カナー	クーナガラ	クー	ケー
来る	コナー	キナガラ	クル	コー
する	シナー	シナガラ	シル	セー
開ける	アゲナー	アゲナガラ	アゲル	アゲロ
教える	オセナー	オセーナガラ	オセール	オセーロ
入る	ハナー	ハナガラ	ハール	ハーレ
買う	カーナー	カーナガラ	カール	カーレ
考える	カンガーナー	カンガーナガラ	カンガール	カンガール

これを見ると、否定は「ナー」が、並行は「ナガラ」が付くことによって、それらの意味を表し、言い切りと命令は動詞自体の変化(活用形だけで)でそれらを表していると考えられる。そこで、ナーやナガラのようなものを切り出して、枠の外(上)に出すことにする。このような部分が「助詞・助動詞等」である。そして、音韻表記で表すと次のようになる(N=撥音, R=長音)。

活用

	否定(naR)	並行(na η ara)	言い切り	命令
書く	kaga	kagi	kagu	kage
飲む	noma	nomi	nomu	nome
食う	ka	kuR	kuR	keR
来る	ko	ki	kuru	koR
する	si	si	siru	seR
開ける	age	age	ageru	agero
教える	oseR	oseR	oseRru	oseRro
入る	haR	haR	haRru	haRre
買う	kaR	kaR	kaRru	kaRre
考える	kaN η aR	kaN η aR	kaN η aRru	kaN η aRre

今度は、横の列で比べて見ると各語ごとに共通している部分があることがわかる。例えば、「書く」であれば、4種類の形を通して、「kag」という部分が共通している。「開ける」ならば、「age」が共通している。このような部分を切り分けて、枠の外(左側)に出すことにする。この部分が「語幹」である。

	否定(naR)	並行(na η ara)	言い切り	命令
書く(kag)	a	i	u	e
飲む(nom)	a	i	u	e
食う(k)	a	uR	uR	eR
来る(k)	o	i	uru	oR
する(s)	i	i	iru	eR
開ける(age)	-	-	ru	ro
教える(oseR)	-	-	ru	ro
入る(haR)	-	-	ru	re
買う(kaR)	-	-	ru	re
考える(kaN η aR)	-	-	ru	re

このような手続きで枠の中に残った部分(「書く」であれば、「a, i, u, e」のような部分)が「語尾」である。手続きにより何もなくなってしまう欄には「-」を記入しているが、これは語尾が「無い」ことを示す。

ここまでで、語ごとの語形変化の違いがある程度見えて来た。

語どうしを比べて、語尾の分布に区別がある場合「/」で、区別がないと見られる場合「=」で示すと次のように示すことができる。

「書く」=「飲む」/「食う」/「来る」/「する」/

「開ける」=「教える」/「入る」=「買う」=「考える」

さらに、上に記さなかった別の「助詞・助動詞等」との組み合わせを見てみよう。そうすると

活用

次のように、「開ける」と「教える」にも異なりがあることがわかる(Q = 促音)。

	希望(taR)	推量(koQta)	禁止(na)
開ける(age)	Q	Q	N
教える(oseR)	-	-	-

また、「入る」「買う」「考える」も次のように使役形(「～させる」に相当)を見ると異なっていることがわかる。

	語幹	語尾	助動詞
入る.....haRraseru(入らせる)	haR	ra	seru
買う.....kaRseru(買わせる)	kaR	-	seru
考える...kaN η aRsaseru(考えさせる)	kaN η aR	-	saseru

3.3. 活用表の構築

以上のような作業を繰り返すことで、種市町平内方言の動詞の活用には、次の9種類の活用のタイプがあることが明らかになる。

- 「書く」「読む」のタイプ
- 「来る」のタイプ
- 「開ける」のタイプ
- 「入る」のタイプ
- 「考える」のタイプ
- 「食う」のタイプ
- 「する」のタイプ
- 「教える」のタイプ
- 「買う」のタイプ

このうち、～は、語幹が子音で終ることから子音語幹動詞、～は語幹が母音で終わることから母音語幹動詞と呼ぶ。

そして、～から順に子音語幹1動詞...、～から順に母音語幹1動詞...、と番号を付けて分類する。

このような作業を重ねて、活用のタイプと語幹、語尾、助詞・助動詞等の組み合わせを一覧表に整理すると「活用表」ができあがる。ここでは種市町平内方言で得られた動詞の活用表の概略を示す(表の「おもな後続する助詞・助動詞...」の部分は「助詞・助動詞等」に同じと見てよい)。なお、詳細な活用表は大西(1995a)を参照のこと。

注意しておきたいのは、活用形は活用全体を通しての枠組みでもあることだ(cf. 3.1.)。特定の活用のタイプで複数の活用形にわたって同じ形を持っていても、別のタイプで異なる形を持っている場合は、枠組みとして活用形を区別することが必要である。

例えば、子音語幹1の「書く」は、活用形1・2・3を通して、語尾はaで区別がない。しかし、子音語幹3の「来る」の語尾は、活用形1 = o・活用形2 = i・活用形3 = ura、で区別がある。そこで、これらの活用形は活用全体の中で区別して記述している。

活用表の中で「@」を付したものは、「交替語幹」と呼ぶものである。語幹は、多くの活用形を通して共時的に変化しない部分であるが、一部で一般の語幹に語尾を足しただけでは記述できない形が現れた場合に交替語幹として扱っている。いわゆる「音便」も含まれるが、それだけで

活用

岩手県種市町平内方言の動詞の活用表(概要)

活用形番号	子音語幹動詞					母音語幹動詞					語幹 /たの抜ける語幹・形 はいは抜ける語幹・形	
	子音語幹1	子音語幹2	子音語幹3	子音語幹4	母音語幹1	母音語幹2	母音語幹3	母音語幹4	母音語幹5			
	書く	飲む	取る	食う	来る	する	開ける	教える	入る	買う		考える
	kag	nom	tor	k	k	s	age	oseR	haR	kaR	kaNgaR	
1	a	a	@toN	a	o	i	-	-	-	-	-	naR(否定)
2	a	a	a	a	i	i	-	-	ra	-	-	saR(丁寧命令)
3	a	a	a	a	ura	a	ra	ra	ra	ra	ra	ba(仮定2)
4-1	a	a	a	a	ira	a	×	×	ra	-	×	seru(使役)
4-2	×	×	×	×	×	×	-	-	×	×	-	saseru(使役)
5	i	i	i	uR	i	i	-	-	-	-	-	nagara(並行)
6	**i	i	@toQ	uR	iQ	iQ	Q	-	-	-	-	taR(希望)
7	u	u	u	uR	uru	iru	ru	ru	ru	ru	ru	言い切り
8	u	u	@toQ	uR	uQ	iQ	Q	-	-	-	-	joRta(様態)
9a-1	u	u	×	uR	×	×	×	×	×	×	×	goQta(推量1)
9a-2	×	×	@toQ	×	uQ	iQ	Q	-	-	-	-	koQta(推量1)
9b-1	u	u	×	uR	×	×	×	×	×	×	×	zigi(～時:連体)
9b-2	×	×	@toQ	×	uQ	iQ	Q	-	-	-	-	cigi(～時:連体)
9c-1	u	@noN	×	uR	×	×	×	×	×	×	×	beR(推量2:意志)
9c-2	×	×	@toQ	×	uQ	iQ	Q	-	-	-	-	peR(推量2:意志)
10	u	u	@toN	uR	uN	iN	N	-	-	-	-	na(禁止)
11	e	e	e	eR	ure	e	re	re	re	re	re	ba(仮定1)
12	e	e	e	eR	ire	e	re	re	re	re	re	Rru(可能1)
13	e	e	e	eR	oR	e	ro	ro	re	re	re	命令
14a-1	×	×	@toQ	uQ	i	×	×	×	-	@kaQ	×	ta(過去)
14a-2	@kaR	@noN	×	×	×	×	-	-	×	×	-	da(過去)
14a-3	×	×	×	×	×	a	×	×	×	×	×	過去
14b-1	×	×	@toQ	uQ	i	×	×	×	-	@kaQ	×	tera(継続現在)
14b-2	@kaR	@noN	×	×	×	×	-	-	×	×	-	dera(継続現在)
14b-3	×	×	×	×	×	e	×	×	×	×	×	ra(継続現在)
15-1	u	u	×	×	u	i	-	×	×	×	×	Qke(確信)
15-2	×	×	@toQ	uR	×	×	×	-	-	-	-	ke(確信)

はない(「音便」という説明は歴史的な解釈が含まれることに注意)。交替語幹は、設定することにより体系をすっきり示すことができる点で有効である。しかし、むやみに使うと体系がかえってつかめなくなるので慎重に利用したい。

なお、語によって、ひとつの活用形に語尾と交替語幹が現れたり、相互に異なる形で交替語幹が現れるというような異なりが見られても、同じ活用のタイプにまとめている場合がある。例えば、子音語幹1を参照のこと。実はこの活用表には概略しか示していないが、もう少し細かく子音語幹1の活用を検討してみると、語幹末の子音によって交替語幹が相補的に現れていることがわかる。そのような相補的なものは、むしろまとめて扱うことで体系的なとらえかたができる。

4. 研究の現状

活用形を学校文法の未然・連用・終止・連体・仮定・命令といった枠組みだけで扱おうとすると無理が生じる。また、語も共通語のタイプだけをもとにしたのでは漏れが多すぎる。ある意味でこれらの枠の存在を無視し、自由な枠を設定して記述することで、はじめてそれぞれの方言の活用体系にたどりつくと考えてよいだろう。

活用の記述は、文法の一分野としての形態論(cf.5.1.)のもっとも基礎を支える。しかし、現在あまり盛んではない。義務教育で教わるゆえに、すでに完了した分野であるようなイメージを与えるのかもしれない。また、多量かつ質の高いデータが網羅的に必要で、それらを綿密に積み上げ時にスクラップアンドビルドをくりかえしながら体系を構築する作業は確かに神経を要する。

しかし、その記述結果は、体系としての美しさが約束されている。こつこつ積み上げ、きれいな体系を構築するという志向にかなう。そしてその期待はけっして裏切られない。

5. 発展

5.1. 単位

3.の説明の中であえて目をつぶってきた問題がある。

第1点は、動詞や形容詞と記しながら「動詞とは何か」「形容詞とは何か」という「品詞」の説明を行っていないことである。関連して、助詞・助動詞を特に定義づけることなく取り扱ってしまっている。

第2点は、「語が…」と定義しつつ、「語」とは何かの定義を行っていない。

例えば、「書かない」という形をもとに考えてみよう。この形は、次のように分解される。

kak(語幹)-a(語尾)-nai(助動詞)

<---活用形----->

<-----文法形----->

しかしこれだけでは、「語」とはどこまでなのか、動詞とはどこまでなのか、といったことが明確ではない。ある立場(伝統的な見方)では「書か」まで(つまり活用形)を語とし、動詞と見る。

一方、ある立場(現在はこちらの方がやや優勢)では「書かない」全体(つまり文法形)を語とし、動詞と見る。後者の立場では、ここで文法形としたものが活用形として扱われることがあるので注意が必要だ。3.での説明は、どちらかというと前者に近い立場で進めている。

これらの品詞論、また単語の定義というのは、活用における理論的中心課題である。活用を含む語の用法を扱う研究分野は「形態論」と呼ばれるが、形態論の究極の目標は「単語とは何か」の追究に尽きるとも言われる。そして、どのような立場によるにしても語幹・語尾・活用形・助動詞・文法形と多重に分節可能な構造をいかに矛盾なく位置付けるかの具体的な方策が要求される。

単語論や品詞論は、どのような文法研究であっても、はじめの一步であり、再び回帰せざるをえない場所であることを忘れてはならない。

5.2. 通時的分析

5.2.1. リストの基準

Cで挙げる文法形リストならびに動詞語彙リスト(また、それぞれからの選択的に組み合わせたBの項目リスト)は、実は、中央語の歴史をかなり意識している。2.で歴史的観点の排除を提言していることと矛盾するようだが、具体的な項目を設定するためには何らかの基準が必要であり、この点で歴史的観点は実はもっとも重要なポイントとなる。しかし、すべてがこの観点到に負う必要はなく、そのことを極端に宣言したのが2.の言説であると理解してほしい。

それぞれのリストの中でも特に語彙リストは中央語との歴史的対応関係を基準にしている。この点について説明する前に中央語の活用の歴史を簡単に記しておく。

5.2.2. 中央語の活用の歴史

上代～中古(奈良～平安時代)の動詞には、9種類の活用のタイプが存在した。以下に挙げる例は代表的な語の終止形である。ただし、このうち下二段は、不安定なタイプである。

四段(咲く)	上二段(見る)	上二段(起く)	下二段(蹴る)	
下二段(明く)	カ変(来)	サ変(為)	ナ変(死ぬ)	ラ変(有り)

また、上二段・下二段・カ変・サ変・ナ変・ラ変では、終止形と連体形に区別があった。

	上二段	下二段	カ変	サ変	ナ変	ラ変
終止形	起く	明く	来	為	死ぬ	有り
連体形	起くる	明くる	来る	為る	死ぬる	有る

中世(鎌倉～室町時代)に入るとラ変が四段に統合する。また、終止形と連体形の区別が失われ、先の時代の連体形が終止形の用法で用いられるようになる。つまり、連体形から独立した終止形は、用いられなくなった。これらの統合は、中世でも時代が下るほど進行する。

近世前期(江戸時代前期・上方語)には、上二段が上二段に統合し(起くる 起きる)、母音動詞化が進行する。また、下二段でも短い語形の動詞において、母音動詞化が起こる(寝る 寝る)。

近世後期(江戸時代後期・江戸語)には、下二段の長い語も母音動詞化する(明くる 明ける)。また、ナ変が四段に統合し、サ変においては、未然形が「し(ない)」、命令形が「しろ」となり、

現代語の活用がほぼ成立する。

形容詞においては、連用形「高く」に対する「高かり」、連体形「高き」に対する「高かる」など、存在動詞「有り」を取り込んだカリ型活用の発達が上代・中古に認められる。これは有史的に確認できる活用の獲得(新規活用型の成立)の数少ない例である。

中世に入ると動詞に平行して終止形と連体形の統合が始まる。その一方で「高く 高う」や「高き 高い」のような音便が発生する。前者の終止・連体形の統合はク活用・シク活用の統合に直結する。ク活用の連体形が終止形に変化することによりク活用とシク活用の区別が失われることは、次の例で理解されるだろう。

	ク活用	シク活用
連用形	高く	美しく
終止形	高し	美し
連体形	高き	美しき

5.2.3. 動詞活用の分布と歴史

特に動詞について、中央語の歴史が方言とどのような関係にあるかを簡単に見ておこう。

2. で記したように方言における活用の歴史は、大きくは、中央の歴史の反映と活用型相互の類推を中心とした独自変化で説明される。動詞における後者の独自変化は基本的に活用のタイプが減少することであり、中央語と比較するなら、活用のタイプに所属する語彙グループが統合して行くことにほかならない。

中央語におけるもっとも古い語彙グループを「類」という名称でとらえ、それがどのように統合していくかを地図の上に表現してみよう(不安定な下一段は除外している)。

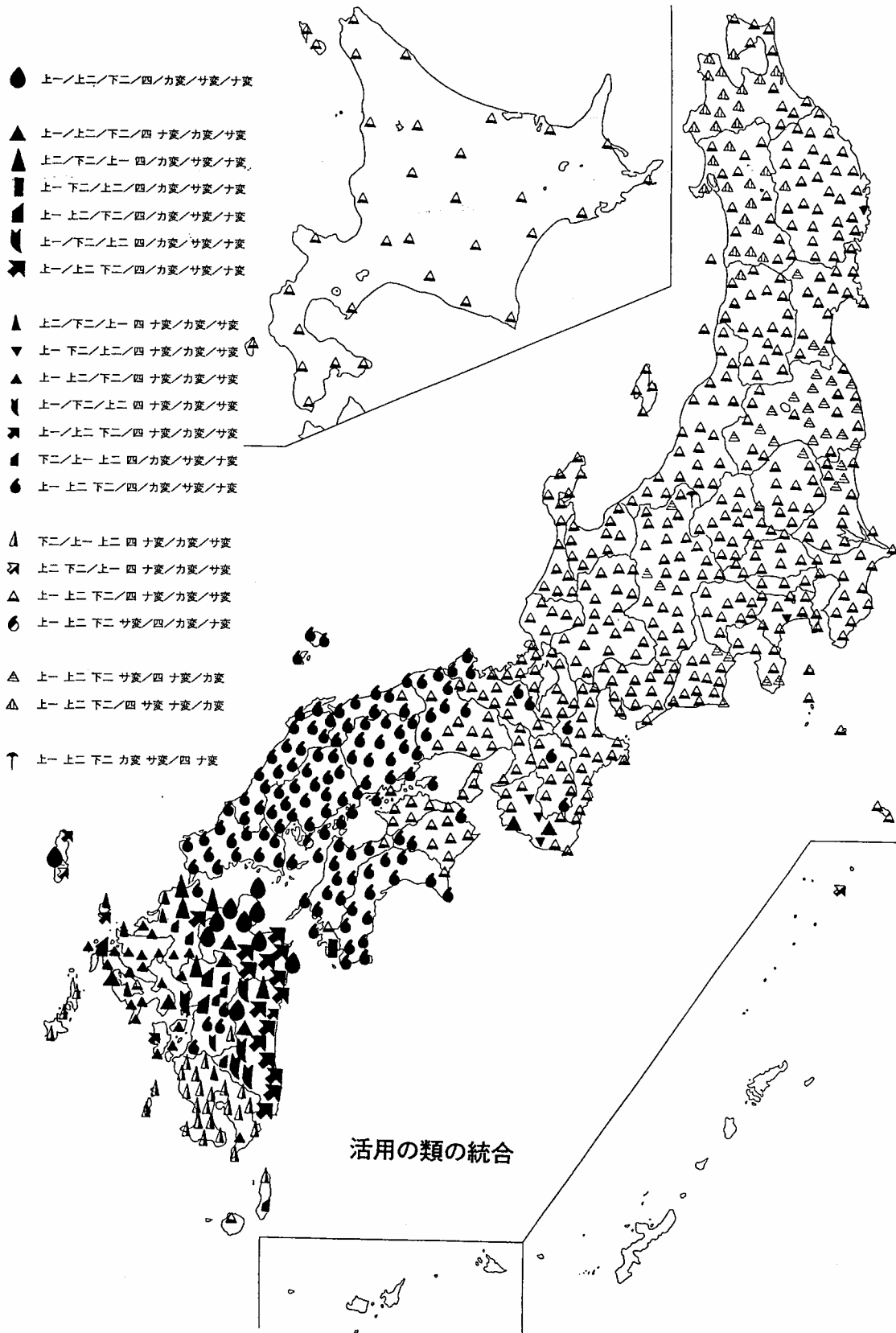
このように地図上で見てみると、自分が調査しようとしている場所が歴史的にどのように位置付けられるかが把握できるであろう。中世に近い場所にいる人もいれば、共通語よりも統合が進んだ場所にいる人もいるかもしれない。後者は、ある意味で未来にいるともいえる。

数少ないながら終止形・連体形の区別のある場所にいる(もしくは行こうとしている)人もいるかもしれない。実はこのことは地図では示していないのだが、琉球を除き本土で終止形・連体形の区別がある方言は全国でも数地点知られるに過ぎない。したがって、もし、この区別が未知の場所で見つかったなら、大発見ということになる。

また、現在までのところ、活用の類が特別な理由もなく活用のタイプとして分割している例は知られていない。もし、それが見つけられたなら、相当な古層がむきだしになっている可能性があり、これまた新発見である。

なかなか「発見」は難しいだろうが、どこかにロマンを抱きながらこつこつと作業を進めるのもささやかな楽しみかもしれない。

活用



6. 文献

大西拓一郎(1995a)「岩手県種市町平内方言の用言の活用」『研究報告集(国立国語研究所)』16

大西拓一郎(1995b)『日本語方言活用の通時的研究序説』(科研費報告書)

国立国語研究所(1991,1993)『方言文法全国地図』2-3(財務省印刷局)

鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』(むぎ書房)

鈴木康之(1977)『日本語文法の基礎』(三省堂)

服部四郎(1960)「具体的言語単位と抽象的言語単位」『言語学の方法』(岩波書店)

服部四郎(1960)「附属語と附属形式」『言語学の方法』(岩波書店)

活用

B 項目

Aの3.1.で記したように記述作業は語形変化のリストアップから始まるが、手がかりがないとどこから手を付ければよいのか難しい。ここでは手がかりにするための項目リストを挙げる。

- (1) Cの資料の動詞語彙リスト(C-2)と文法形リスト(C-1)の中から基礎的と判断されたものを選択し、それらを組み合わせた。
- (2) したがって、それぞれのリストの番号(コード)の組み合わせで項目が指定される。ただし、形容詞と形容動詞については、今回は語彙リストを用意しなかったので暫定的に01, 02のようにコードを与えている。
- (3) 各項目が『方言文法全国地図』ならびにその準備調査の活用関係の項目に一致する場合にはそれらの質問文を提示した。質問文末尾の番号は、各調査票の質問番号で、Pが付くのはそれが準備調査票に基づくことを示す。
- (4) 文法形リストには優先度に2段階(最優先 = **, 優先 = *)設けた。*マークが多いほど優先度が高い。*マークを目安に最優先から順次手掛けることで、次第に詳しい全体像が明瞭になることが期待される。
- (5) 次の順で配列している。
 1. 品詞は、動詞・形容詞・形容動詞の順にした。
 2. 各品詞の中では、文法形(カテゴリーの枠組み) / 語彙の順で配列した。したがって、同じ文法形の中で語彙が入れ替わり現れる。
 3. 文法形は、優先度の高いものを先に配列した。
- (6) 配列をもとにして項目に通し番号(コード)を付した。このコードを DGC(Dialect Grammar Conjugation catalogue)ナンバーと呼ぶ。
- (7) 語彙コード、文法形コードについては、Cの各リストとその説明を参照のこと。
- (8) (5)の2のように文法形ごとに語が入れ替わり現れるが、実際の調査では文法形を優先にすべきか、語を優先してさまざまな文法形を入れ替えるのがよいかは、一概には言えない。ただし、はじめて調査する方言では、文法形優先にして少数の語を入れ替えながらおおまかな体系を把握し、詳細な体系が把握できたら、それぞれの活用のタイプに所属する語を見極めるために語を優先して進めるのが有効なように思われる。もっとも、インフォーマントの志向に左右されることもあるだろうから、目的や状況に応じて、使い分けるのがよいだろう。
- (9) ここで文法形と呼ぶのは、文法カテゴリーの枠組みを指す。具体的な文法形は個々の語で異なるのは当然であるので注意してほしい。また、実際に現れる助詞・助動詞はそれぞれの方言で異なり、さらにそれに対応して、カテゴリーが分岐することや、無効な場合もある。対象とする方言の事実にあわせて、枠を細かくするなり、飛ばすなりして、利用するとよい。

活用

調査項目は次のPDF

[10_katsuyoo_B.pdf](#)

活用

C 資料

C-1には共通語をもとにした文法形(カテゴリー)のリストを掲げ、C-2には歴史的観点を規準にした動詞の語彙リストを掲げる。C-1は、文法形のリストとしているが、実際には、文法カテゴリーのリストである。動詞なら「書く」、形容詞なら「高い」、形容動詞なら「静かだ」をもとに具体的な文法形を掲げた。方言により諸種の助詞や助動詞が現れ、また、それぞれに応じた活用形が見られるであろう(また、中にはその方言で無効な文法カテゴリーもありえる)。それらを具体的に引き出すための材料である。

それぞれのリストに挙げた項目には次のようなカタログ名を与え、頭から順に番号によりコード化している。

文法形(C-1)

動詞(VC = Verbs Categorical catalogue)

形容詞(AC = Adjectives Categorical catalogue)

形容動詞(AVC = Adjetival Verbs Categorical catalogue)

語彙(C-2)

動詞(VL = Verbs Lexical catalogue)

形容詞(AL = Adjectives Lexical catalogue)

形容動詞(AVL = Adjetival Verbs Lexical catalogue)

ただし、語彙リストは今回は動詞のみを掲げている。

C-1とC-2を組み合わせることで具体的な文法形 = 項目(調査項目)が形成される。したがって、それぞれの項目はそれぞれのリストのコードの組み合わせで次のように指定することが可能である。

項目コード = 語彙コード + 文法形コード

動詞 = VL + VC

形容詞 = AL + AC

形容動詞 = AVL + AVC

Bの項目でこの具体的な適用を参照することができる(ただし、形容詞と形容動詞の語彙コードは暫定的な番号である)。なお、C-1とC-2のリストをもとにBの項目を作成しているためBとCには重複がある。

また、リストには最優先(**)、優先(*)を提示した(語彙リストは優先(*)のみ)。

なお、本資料のうちC-1は、国立国語研究所旧言語変化研究部第1研究室が1984年に行った記述調査の調査票に依拠するところが大きい。また、小西いずみ氏より文法形と語彙の各データに追加的提供という形での協力を得た。

活用

文法形リストは次の PDF

[10_katsuyoo_C-1.pdf](#)

活用

C-2. 動詞語彙リスト

(1) 配列

「活用の類」を優先している。

上二段・下二段は、「語の長さ」「活用の行」の順で優先して配列した。

四段は「活用の行」「語の長さ」の順で優先して配列した。

なお、活用の類の設定は、主としてデータソースの古典対照語彙表に従っている。

(2) データソースは、以下のとおりである。

古典対照語彙表 = 宮島達夫・中野洋・鈴木泰・石井久雄(1989)『フロッピー版古典対照語彙表』(笠間書院)

系井 = 系井寛一(1964)「九重町方言の動詞の語形表」『大分大学学芸学部研究紀要』2-4 (人文・社会科学)A集

金田一 = 金田一春彦(1974)『国語アクセントの史的研究 原理と方法』(塙書房)

大西 = 上記に対する大西の追加

小西 = 上記に対する小西の追加

(3) 古典対照語彙表の番号

データソース古典対照語彙表の収録語に頭から付した通し番号である。同じ作業を行えば、古典対照語彙表のデータとリンクすることが可能になる。

(4) 漢字表記は、基本的にデータソースに従っている。この表記により、語の意味がおおまかに把握できるであろう。

(5) アクセント類は、データソースの金田一に従う。

(6) 俚言数は、『日本方言大辞典』の索引をもとにして次のように数えたものである。

1 語形 1 として算出した。

見出しがあっても、親見出しがなく小見出しのみの語は 0.5 で算出した。したがって、数値に小数点以下の 0.5 という数字が現れている。

空欄のものは未調査のものである。

この俚言数により、当該の語の意味に対応する方言語形が現れやすいかどうかの目安が得られるであろう。

活用

動詞語彙リストは次の PDF

[10_katsuyoo_C-2.pdf](#)